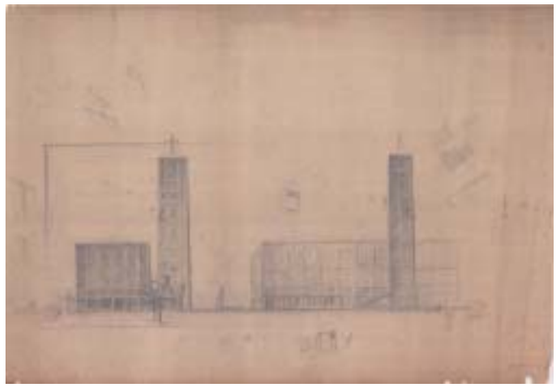
村野藤吾建築図面について

美術工芸資料館に、日本の近代建築を代表する建築家の一人である村野藤吾（1891～1984年）の建築図面資料が収蔵品として最初に登録されたのは、1996年12月20日のことである。これは、村野の没後、遺族から寄贈されたおよそ5万点を超える建築図面の整理が順次行われ、正式な登録手続きへと進む流れの起点であり、現時点では、約2万3千点（2008年3月31日現在）が本館の収蔵品として保管されている。ここでは、建築家・村野藤吾の略歴とこれらの資料が収蔵されることになった経緯、その後の展覧会を中心とする活動などについて簡単に紹介しておきたい。

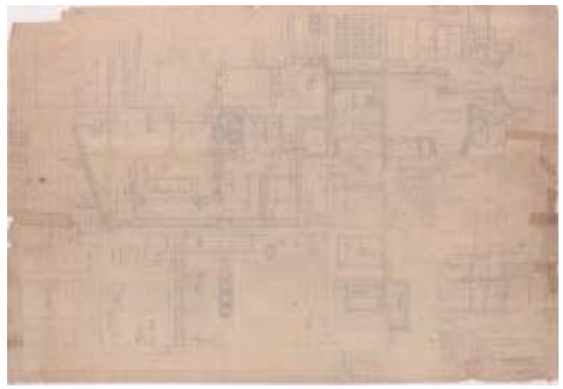
1891年に佐賀県で生まれた建築家・村野藤吾は、1918年、早稲田大学理工学部建築学科を卒業後、大阪の渡辺節建築事務所に入所し、1929年に独立して自らの事務所を設立している。以後、1984年に93歳で亡くなるまでの長い間、関西を中心に精力的な建築設計活動を展開し、たくさんの名作と呼ばれる建築を遺した。代表作品としては、「森五商店東京支店」（1931年）、近年取り壊された「心斎橋そごう」（1935年）、「宇部市民館」（1937年）、「世界平和記念聖堂」（1954年）、「大阪新歌舞伎座」（1958年）、「西宮トラピスチヌ修道院」（1969年）などが挙げられる。また、京都にも、「都ホテル佳水園」（1959年）や、遺作の一つとなった本学にも程近い「宝ヶ池プリンスホテル」（1986年）がある。村野藤吾は独自の建築思想と職人的な作風で知られ、その建築作品に対しては、日本建築学会賞、日本芸術院賞など数多くの賞が授与されている。また、近年では、再評価の動きも顕著であり、そのことは、例えば、近代建築の保存を提唱する世界的な組織であるDOCOMOMOの日本支部が2003年に選定した現存する日本近代建築100選の中で、村野作品が5件も選ばれたことにも現れている。また、2006年には、被爆地・広島に再建された「世界平和記念聖堂」が、丹下健三の「広島平和記念資料館」（1955年）と共に、戦後の建物としては初となる国の重要文化財にも指定されている。ここに掲載する図面は、その「世界平和記念聖堂」の初期の立面図と実施設計の詳細図である。



世界平和記念聖堂　立面習作（AN.4996-92）

このように、すでに歴史的な資料ともいえる村野藤吾の貴重な建築図面が、一括して本学へと寄贈されることになった経緯については、本学の名誉教授であり、美術工芸資料館の初代館長を務めた中村昌生の回想（註1）によれば、おおよそ次のようなことだったという。

1991年、中村は、村野のある建築作品を案内された際、村野事務所の岡林成明から建築図面を「美術工芸資料館で預かって貰えないでしょうか」との打診を受ける。そして、翌年の1992年には、村野の没後に事務所を引き継いだ子息の村野漾（1936～2005年）から、正式に、「村野の図面は全部京都工芸繊維大学の美術工芸資料館へ寄贈することに決心しましたから宜しく」との手紙を受け取る。また、中村は、この依頼の背景には、当時、資料館専任の助教授（後に教授、館長、現名誉教授）だった竹内次男の父が村野事務所の戦前の所員だったこと、村野の良き理解者である編集者・吉田龍彦を仲立ちとする村野藤吾との個人的な信頼関係があったことも証言している。こうして、中村の後を引き継いだ竹内の文章（註2）によれば、1994年、最初の図面類が資料館へと持ち込まれている。しかし、紙筒に長年入れられて丸まっていた図面をシート状に伸ばすために数年を要し、ようやく、1997年秋から本格的な図面整理に着手できたのだという。一方、整理作業と併行して広く図面を公開するべく、1999年夏、外部の委員を交えて、「村野藤吾の設計研究会」（初代委員長：西村征一郎・造形工学科教授、現名誉教授）が組織される。そして、同年11月、第1回の「村野藤吾建築設計図面展」の開催が実現する。以後、研究会の委員長は、西村から竹内、竹内から現在の石田潤一郎（大学院工芸科学研究科教授）へと引き継がれながらも、昨年2008年の第10回展に至るまで、展覧会は毎年開催され、それに合わせて、図録『村野藤吾建築設計図展カタログ』の発行とシンポジウムが行われてきた。尚、十年間続けられた展覧会は、一応、昨年で一区切りとなったが、研究会の活動は今後も続けられていく予定である。



同左　正面玄関廻り詳細図（AN.4995-02）

資料館へと寄贈された建築図面は、村野藤吾の建築創造の軌跡を知る上で欠かすことのできないものばかりである。というのも、そこには、実施設計図と呼ばれる最終の図面ばかりではなく、通常は目にすることのできない途中段階の検討用の図面や、そこに描き込まれた村野の自筆と思われるスケッチ、あるいは、計画だけに終わった未完の建築作品の図面など、まさしく建築設計の全過程にわたっているからである。その意味で、今後、村野藤吾の建築作品への評価が高まるに従い、その存在価値は増していくものと思われる。また、建築の設計を志す学生にとって、村野が遺した建築図面は、建築教育という視点からも大きな意味を持ち始めている。現代の建築界においてはコンピューターによる設計が当たり前になりつつある中で、手描きで端正に描かれた原図は何よりの生きた教材であり、それに触れることで、学生たちは建築に向き合う姿勢までも学び取るに違いない。残念ながら、現在、日本建築学会に建築博物館は設置されているものの、特定の建築家の図面を一括して収集整理し、それを公開し、活用している博物館は、我国にはほとんど存在しない。そうした中にあって、本学の村野藤吾資料とその活用の模索は、先駆的な役割を担いつつあるとも言える。その意味からも、村野藤吾の建築図面資料の公開へ向けた地道な整理作業は、今後も続けられる必要がある。また、現存する村野の建築作品の保存や修復、それに伴う各地での展覧会などの開催といったニーズにも、積極的に協力していくことが求められている。何よりも、そのことが広く日本の近代建築の文化的な価値を支えることへとつながっていると思うからである。

註
1：中村昌生『数寄屋と五十年』淡交社2007年
2：竹内次男「村野藤吾建築図面受け入れ並びに整理経過を巡って」『村野藤吾建築設計図面展カタログ』京都工芸繊維大学美術工芸資料館・村野藤吾の設計研究会1999年

美術工芸資料館教授　松隈　洋